

---

# 仮面ライダーディケイド～涼宮ハルヒの世界～

RYO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド〜涼宮ハルヒの世界〜

### 【Nコード】

N0070M

### 【作者名】

RYO

### 【あらすじ】

新たな世界に着いた士たち

しかしそこは怪人もライダーもない世界で…

## ゝプロローグ 涼宮ハルヒの世界ゝ（前書き）

初投稿です。

色々とダメな点もあるとは思いますが読んでやってください。

## 「プロローグ 涼宮ハルヒの世界」

「ここが新たな世界か。」

オレは呟く。つい先ほどとある世界の旅を終えたのでそろそろ来るとはおもっていた。

だがこれは何だ？

降りて来た新しいスクリーンに描かれていたのは、

「何て読むんですかねえ。ZOZ団？」

オレが思っていた事を夏みかんが先に口にする

「なんだか悪の組織みたいな名前だな。大ショッカーの支部が何かかな。士、何か知ってるか？」

ユウスケは俺に振ってくる。知るわけないだろう。

「さあな。それをこれから調べるんだろ？」

ひとまずそう言ってる。すると俺の言葉に納得したのか、

「そうか。今度はどんなライダーが居るのかな。」

などと言い始める。楽しそうでいいな。俺にもその頭を分けてくれ。

「この世界にはライダーは居ないよ。」

不意に背後から声。聞き覚えのある、あまり好きな奴じゃない声でした。

振りかえるとやっぱりというか、そこには、

「やっぱりお前か、海東。一体いつの間に俺の背後に現れやがったんだ？というか何故お前がこの世界に居る。」

「当然だよ。僕はお宝があるところになら何処にでも行くからね。」

「質問の答えになってない。」

と、ここで夏みかんが口を挟む。

「ちよつといいですか？ライダーが居ない世界って言いましたけど、海東さんは何か知ってるんですか？」

ユウスケも入ってくる。

「教えてくれよ、ここは何の世界なんだ？」

海東は一気にまくしたてられ少々困惑気味に、

「落ち着きたまえ。ここは、そうだな、ライダーも怪人も居ない、でも宇宙人や未来人、超能力者が居る世界、  
と言えは分りやすいかな。」

「分かるか！一体何の世界なんだ。」

海東は少しの間をおいてから、

「ここは、涼宮ハルヒの世界だ。」

そう言った。涼宮ハルヒ？なんだそりゃ。誰かの名前か？

俺と同じこともユウスケも思ったのか、同じことを海東に聞く。

「ああ、そうだ。この世界の最重要人物、それが涼宮ハルヒだ。」

「最重要って、一体どんな意味で重要なんだ？」

「さあ、そんなことよりも早くお宝を探さないと。」

士、悪いがその話はもうお開きにしよう。」

そう言つと海東は背を向けさつさと立ち去つてしまう。

「一体どういふことなのでしょう。士君、とにかく私たちも外に出てみましょう。」

そう言つと夏みかんも出て行ってしまう。ユウスケも付き従う。

「はあ、やれやれだな。」

そう呟き俺も写真館を後にする。

まあうだうだ考えるよりは外に出てみて実際に確かめた方がいいしな。

そう思い夏みかん達を追う。

## ゝプロローグ 涼宮ハルヒの世界ゝ（後書き）

どうだったでしょうか。

色々と無茶な内容でスミマセン。

僕一人ではアイデアに限界があっただんです。

読んでくださった方は良かった点と悪かった点を優しくコメントしてくださいとうれしいです。

## ＼1幕 異変＼

突拍子もない 意味：調子はずれなこと。途方もないこと。突飛。  
辞書にはそう書いてあるだろうが俺ならもつと簡単に説明できるね。  
涼宮ハルヒのこと。

これほどピッタリこの言葉の意味と合う人間もなかなかいないだろう。

とにかく涼宮ハルヒとはそういうとんでもない人物なのである。

10月某日。

つい最近まで誰かが太陽を地球側に投げたのかと思うようなクソ暑い、

というかもはや熱いのレベルまで達していたsummer day  
sはどこかへ去り、

夜は掛け布団が必需品となってきた。まだ日も浅いある月曜日のことである。

本日も涼宮ハルヒはその 突拍子もない スキルを遺憾なく発揮し、俺にこんなことを言ってきた。

「ねえ、キョン。あんた仮面ライダーって知ってる？」

「知ってるも何も、男ならガキの頃に一度は見たことあるだろう。つていきなりなんだ？何故今仮面ライダーの話をする。今は授業中だぞ？」

「そんなことはどうだっていいのよ。とにかく知ってるのね。」

あたし、昨日たまたまテレビつけたらやってたから何となく見てたんだけど、

本当にかっこいいわね、アレ、現実の世界にも居ないかしら。

ううん、居るわ、絶対。私達が知らないだけよ。私達の知らないところで今日も世界の平和を守ってるのね。」

いきなり何を言い出すんだこいつは。頭でも打ったのか？いや、ライダーキックを食らったのか？等と考えているとシャーペンで思い

つきり背中を刺された。

「痛っ！何故刺す。」

「あんた今あたしに対してやましいこと考えてたでしょ。」

「か、考えてねえよ。」

何故こいつは俺の心が読めるんだ？

### 放課後

もちろん今日のSOS団の集まりではそのことが話題となった。

ハルヒが得意げに仮面ライダーについて語るその姿に朝比奈さんは「ふええ」とか「そうなんですか」と相槌を打ちながら

聞いている。長門はいつもの無表情でじっとハルヒを見ている。

古泉もいつもの調子でハルヒの話を黙って聞いている。

言うつかお前らなんとも思わねえのかよ。

ハルヒは一通り仮面ライダーについて必殺技がすごいとか、何故敵は変身前に襲いかからないかとか、

怪人が実際に居ればいいのに等と熱く語り終わると不意に思い立ったのか、

「そうだ。今度の土曜日、怪人探しに行きましょう。いつもの場所に8時に集合ね。」

とまだ月曜日だというのに時間と場所まできっちり指定してきやがった。

怪人なんて居てたまるか。居ても出てくるなよ。こっちには確実に怪人以上に強い奴も居るんだ。長門とか長門とか長門とか。

出て来たって返り打ちだぜ。

「じゃあ、今日はこれでおしまい。」

そう言うハルヒはさっさと部室を後にする。

やれやれ、いつも楽しそうでいいな、お前は。

「困りましたねえ。」

不意に古泉が本当に困っているのかと問いたくなるような顔で話を切り出す。



「そうですね。今日の涼宮さん、本当に楽しそうでした。」

朝比奈さんも古泉に続いて切り出す。こちらは本当に困った顔をしている。

困った顔もかわいいですよ、朝比奈さん。

「あなたはどう思いますか？」

不意に話を振られてアホな方向へ行っていた思考をもとに戻して答える。

「どうって言われてもな。俺には一体何が困っているのかもわからない。」

正直に答えると古泉はさも意外そうな顔をし、

「そうですか。ではこう言えば分りますか？涼宮さんは今日本当に楽しそうに仮面ライダーについて語っていた。

怪人がこの世界にも現れればいいのに、と。」

「ちよつと待て、じゃあなにか？明日からここは怪人が世界征服を狙って無意味な破壊を繰り返す世界に変わっちまうってことか？」

「その可能性は、ゼロではありませんよ。」

なにしろ涼宮さんには、

「願望を実現する能力がある、か。」

「そういうことです。」

「だがな、あいつは突拍子もないことを言い出す割にはちゃんとした常識も兼ね備えているんじゃないのか？」

それならいくらなんでもそこまでは、

「そうともいえません。今日の涼宮さん、とても楽しそうでしたから……。」

朝比奈さんまで言い出す。いや、無いだろ。さすがにそこまでは。でも思い当たることは多々あるしな。

「とにかく、明日になればわかることです。今日はとりあえず解散ということ。」

「おい古泉、お前らしくもない、仮にもし明日お前や朝比奈さんの言うように怪人が現れる世界になったとして、

その場合の対抗策を考えるのがお前じゃないのか？」

「そう言われましても、今回は本当にどうなるかわかりませんし、仮にもし現れた場合は、仮面ライダーの方も同時に現れるでしょう。」

そう言つて古泉、続いて長門も教室を後にする。

仮面ライダーねえ、今やつてるのはなんだ？Wだっけ。

朝比奈さんも今日は教室に入るや否やハルヒのトークを聞かされ続けていたのでメイド服に着替えておらず、すぐに後に続く。

俺も部室を後にすると帰路についた。

その帰り道俺は色々と思考する。

今回はマジでないよな、ありえなさすぎる、仮面ライダーなんて何を思つてそんなもの見ようと思つたんだ、ハルヒの奴。

まあ確かに遊びの内容が小学校低学年の男子生徒のようなやつだ。特撮が好きだったとしてもおかしくはないが。

とは言つても既にそれ以上にありえない事態を色々と体験済みの俺にとっては今更怪人が現れようが別になんとも…、

スマン、前言撤回。

目の前にそいつが、居た。

地獄から湧いて来たような毒々しい外見。背中からは無数の棘が出ていて、トゲトゲのしつぽまである。

体色は紫の、例えるなら、えーと、そうだな、トカゲ男、リザードマンとかいいんじゃないか？

うん、これだ、一番しつくりくる。

なんて考えてる場合じゃねえ。

早く逃げないと。だが足が一步も動かん。

目の前のトカゲ男、リザードマンは一步一步距離を詰めてくる。

えらくゆつくりだな、足がすくんで俺が逃げられないとも思っているのだろうか。実際そうなわけだが。

そいつは長い爪のある腕を振り上げ、俺めがけて振りおろす。さすがにヤバいな。あれに斬られたらどうなるんだ。ナイフで刺されるのとどっちが痛いんだろうな。

俺は思わず目を瞑る。しかしその爪が俺に届くことはなかった。

なかなか斬られる感触が無いので目を開けてみると俺の眼前には北高の制服姿の人影。

背は俺よりも小さい、というかスカート姿なので女子だ。

そこまでしてようやく目の前でリザードマンの爪を受け止めている人物が誰であるのか理解した。

「な、がと…？」

そう、我らが救世主、そして怪人にも引けを取らないであろう戦闘力を備えた長門有希様のご登場である。

やっちまってください、長門様。

おもむろに長門が怪人めがけ手をかざす。口からは呪文のような物が聞こえる。

いつぞやの俺襲撃事件の時のように目の前の怪人のプログラムを書き換えて消し去るのかと思いきや、

「ッ…」

恐らく二度と見れないであろう長門の驚愕顔。

驚いていると言っても恐らく俺で無ければわからないような微々たるものだが。

とにかく、あの長門がそんな表情をしたのである。

すかさずリザードマンの掴まれていない方の手による斬りあげ攻撃。

長門は飛びのいてこれをかわす。俺のすぐ横まで飛んできた。

「逃げて。」

不意に長門がこんなことを言い出す。長門らしくもない、お前なら俺を守りながらも十分戦えるだろう。

で、頼り過ぎだな、俺。

しかし次の長門の発言は俺の予想を大きく裏切るものだった。

「私では、あれを倒せない。」

「な、なんでだ？前に朝倉にやったみたいにやれば…。」

「もう試した。」

まさか長門の技が効かないとは。どうする、これは絶体絶命という奴じゃ…。

長門でも倒せないって、怪人無茶苦茶強えじゃねえか。

「やれやれ、海東の奴、嘘つきやがって。居るじゃねえか。」

背後からそんな声が聞こえる。俺は驚いて振り返る。

そこには全く見覚えの無い男が立っていた。

そいつは俺達の方を見るとフツと笑いこっぴどく切り出す。

「お前ら、下がってろ。こいつは俺が倒す。」

そう言うのと右手には何やら得体のしれない白いモノ。

男はそれを腹部へと持って行く、すると左右からベルトのような物が伸び白いものを固定する。

左腰にはさっきまで無かった本のようなもので出現していた。

それを開くと中から一枚のカードを取り出す。

「変身！」

掛け声と共にカードを白いものの中へと挿入。おいおい、まさか、

「カメン、ライド…」

独特の電子音。両手で白いものを挟み込む。

「デイクライド！」

さらに音声が鳴り、その男は姿を変えた。

マゼンタ色の体色をした、こいつも怪人でいいのか？だとしたら何怪人だ？マゼンタ色だからマゼンタ怪人とかか？うーむ、しっくりこない。

次の瞬間そいつがおもむろに走り出す。

トカゲ怪人も応戦態勢に入り身構える。

マゼンタ男が間合いに入ったとたんトカゲ男は鋭い爪で先制攻撃。

マゼンタ男はそれをかわしカウンターのパンチ、キックをたたきこむ。

後ろ回し蹴りで相手を後退させるとマゼンタ男は左腰から新たな力

ードを取りだす。

それを先程と同じ動作で挿入。

「アタック、ライド…スラッシュ！」

電子音の後、男は左腰の本を右手に持つ。あとで知ったんだがそれはライドブッカードという名前らしい。

するとさっきまで本だったものが変形して剣状になる。

剣状になった刀身の部分がマゼンタ色に光る。その状態でトカゲ男に剣撃をたたきこむ。

右上からの袈裟切り、返す刃で左から横に払い斬り、振りかぶっての斬りおろし。

その3撃でトカゲ怪人はたまらず吹っ飛ぶ。

ゴロゴロと転がり何とか制止、立ちあがろうともがく。

マゼンタ男は追撃しようと距離を詰める。

ふと、トカゲ男が笑ったような気がした。

その瞬間背中の棘をマゼンタ男目が打ち出す、マゼンタ男は数発受けてよろめくがすぐに横っ跳びに飛んでこれを回避、新たなカードを挿入する。

「アタック、ライド…ブラスト！」

こんどはさっきまで剣だったものが銃状に変形。

銃口を怪人に向け引き金を引く。

銃が分裂したように見え、無数の弾丸が敵をうちぬく。

全ての弾丸をまともに受け、無様に転ぶ。

「そろそろ、トドメといくか。」

マゼンタ男は新たなカードを取り出すとそう言いながら挿入。

「ファイナル、アタック、ライド…ディディディケイド。」

音声の後、マゼンタ男の前に無数のカード状の物が出現。

マゼンタ男が跳躍するとカードも後を追うように上昇。

マゼンタ男はそのカードの中へと身を投げ出す。

すると信じられない速さであっという間に怪人のもとまで移動し、その勢いのままキック。

俗に言うライダーキックという奴が。しかし「ライダー、キイイイイック！」とは言わないんだな。

ライダーキックをともに食らった怪人は吹き飛び爆発。その場から消滅した。

変身解除した男はこちらへと歩いてくる。とっさに俺は思ったことを口にする。

「あんだ、もしかして仮面ライダーか？」

恐る恐る尋ねる。すると男は意外、といった表情の後言った。

「なんだ、知ってるのか？という事はこの世界にもライダーが居るのか？」

「いや、そうじゃないんだ。」

「どういふことだ。」

俺はそれから涼宮ハルヒのこと、仮面ライダーはテレビの中だけの話ということ、

恐らくハルヒのせいでこうなったことまでを洗いざらい話した。

初対面でこれだけ話してしまうのは妙と思うかもしれないが、とにかくこの時はそうしなければいけないような気がしたんだ。

長門はさつきから心なしかしょんぼりしていても少ない口数<sup>ぐち</sup>が更に少ない。

同意を得ようと長門に話を振った時、いつもなら「そう、」と言つてうなずくのに今回は声も出さなかった。

ちなみに俺からも男に色々と質問してやった。

そしてわかったことが、この男は門矢士、仮面ライダーディケイド  
 というのに変身できて、わけあって色々な世界を旅しているという  
 ことだ。

この世界で自分のやらなければならないことを探しているらしい。正直態度がかいので結構ムカついた。

「なるほどな。大体わかった。」

士はそう言つと一拍おいて続けた。

「つまりその涼宮ハルヒってのに怪人の存在を知られないようにす

るのが俺の当面の目的ってことか。」

「ああ、そうだ、頼む。」

「で、いつまでそうするんだ？」

「何とかして俺がハルヒに怪人なんていない方がいい、居ないに決まっていると思わせるよう説得してみる。」

「ほお、どうやるんだ？」

「そこまではまだ考えてない。」

「キツパリ言うな。」

「仕方ないだろ、俺だっていきなりのことです状況を飲み込むのがやっとなんだ。」

「というか正直言って状況すらあまり飲み込めてない。いや、飲み込みたくない、と言った方が正しいのか。」

俺が飲み込みたいと思うのは朝比奈さんが入れてくれるお茶と母親の手料理だけだ。

「じゃあとにかく俺は、お前が説得するまで怪人の存在を隠しながら涼宮ハルヒを護衛すればいいわけだな。」

「ああ、多分ハルヒは自分が怪人に襲われるのも望んでいるだろうからな。」

「なるほど、いいぜ。わかった。」

わかってくれたか。さっきまでの偉そうな態度とは裏腹に物わかりはいいみたいだ。

どこかの団長様とはえらい違いだな。あいつにもこれくらい俺の意見を聞く素直さが欲しいもんだ。

会話が終わると士はクルリと背を向け、どこかへ行ってしまった。

さてと、俺達も帰るかな。

と、その前に、

「おい、長門、どうしたんだ？心なしが落ち込んでいるような気がするんだが。」

少々の間があつて長門は答える。今日はいつもよりその間が長い気がしたんだが、気のせいだよな。

「あなたを守れなかったことを悔やんでいる。」  
なるほど、それで元気がないわけか。

「気にするな、それに守れなかったってことは無いだろ。  
お前が来てくれなけりゃ、俺は今頃あいつの爪の垢になってるところだぞ。」

だからそう気を落とすな。」

本当にそうだ。ひょっとしたらその後にあのトカゲ男の餌になってたかもしれないな。

あんな奴のこれからの生命活動に必要な栄養分となるのはご免だな  
といってもあいつが肉食なのか草食なのか雑食か、はたまた食事な  
んて必要ないのかは

怪人専門の博士でも、ゲテモノマニアでもない俺には知ったことではないが。

長門は何も言わない。ただうなずきそのまま行ってしまった。

本人なりに納得したのだろうか。

さてと、俺も帰るか。

「いやー悪いね、遅くまで付き合わせちゃって。」

「いえ、いいんです。私もちょうど見たいものがありましたから。」  
場所は変わって夕暮れ時の商店街。

夕日に映える美女二人。朝比奈さんと鶴屋さんだ。

二人が何やら買い物をして一緒に帰っている最中のようだ。

いやー、ほんと、絵になるねえ。

そこらの博物館に飾ってあるお世辞にも美人とは言えそうもないような美人画より圧倒的に。いやマジで。

ちなみにその場に居ない俺が何故二人のことを語っているかという  
と、

ん、なんだって？妄想？夢オチ？違う、事実だ事実。

とにかく何故俺が語っているのかに関しては突っ込んだら負け、と



いうやつだ。

あとでちゃんと教えてやるからそれまで待つてろ。

おっとイカン、話を戻して二人の下校中。

商店街を抜けてもなお、楽しそうに話す二人のもとへ一人の男が現れた。

その男は朝比奈さんを見咎めると唐突にこう切り出した。

「やあ、君が未来人さんだね。」

いきなり何を言い出すんだこいつは。

朝比奈さんと鶴屋さんはわけがわからずポカンとしている。

つて朝比奈さん、あなたまでポカンとしてちゃいけませんよ。

あなたのことですよ。あなたの事言われているんですから。

俺の念が通じたのか、朝比奈さんはアワアワと慌て出す。

「ち、ち、違います。私は未来人なんかじゃありません。」

激しく動揺してそんなことを言うもんだから俺も気が気でない。

そこまでアワアワしてたら逆にそうですと言ってるようなものですよ、朝比奈さん。

俺がこの場に居なかったのは何とも遺憾である。居れば適切なフォローくらい入れられたものを。

しかし男はアワアワする朝比奈さんを睨みつけると言った。おそらくこの光景を見た世の男子の98%はこの男を敵と認識するだろう。もちろん俺も98%の内の一人だ。残りの2%は何かって？そりや勿論女性に興味の無い、所謂ゲイってやつだ。

「とぼけないでくれたまえ。君の正体はちゃんと」

そこで男の話を遮るようにして鶴屋さんが口を出す。本当にいいひとだよな。アニキと呼ばせてもらいたい。

「なんなのさ、あんた。何が言いたいのかさっぱりだけど、みくるに何かしようってんなら」

今度は男が話を遮る。お前、無礼だぞ。アニキのありがたいお言葉だというのに。

「そんなことはどうでもいい。とにかく僕はこの世界に興味がある

んだ。教えてもらえるかな、未来人さん。」

堂々と未来人いうな。こりやもう鶴屋さんにはバレたな。

朝比奈さんはそこで意を決したように、そういう顔も可愛いな、ハッ、いかんいかん、話を続けねば。

「わかりました、ではあそのベンチでお話しましょう。」

ベンチを指さし言う。鶴屋さんは、朝比奈さんの反応を見て危険は無いと悟ったのか、

「なんか大事な話みたいだし、あたしはこの辺で待ってるから、終わったら教えてね。」

空気の読みも完璧である。

「ありがとうございます、では行きましょうか。」

男と二人ベンチに行き話を始める。もつとありがたがれよ。朝比奈さんと二人つきりでベンチで会話なんて、

世の男どもの夢だぞ。もちろんマイドリームでもある。まあ、俺はお前らと違って何度か経験済みだがな。

「一体あなたは何者なんですか？」

座ったとたんに朝比奈さんが切り出す。男は何が愉快なのか、とにかく愉快そうに話し始める。

「僕は海東大樹。世界を旅してお宝を探す、いわゆるトレジャーハンターってやつさ。」

「トレジャーハンター？ 世界を旅って…。」

「あ、世界を旅すると言っても国を行き来するという意味じゃないよ。」

「ここで言う世界とはもつと大きな意味、ということさ。」

「もつと大きな？」

「そう。パラレルワールドってわかるかな。」

「えと、私達の住む世界の他にも同じような世界があって、私達と同じような人たちが暮らしているって…。」

「うーん、ちよつと違うけどまあそんな感じかな。」

説明はこれくらいにして本題に入ろう。」

朝比奈さんが瞳をパチクリさせる。説明わからん。こいつも宇宙人  
未来人超能力者の類か？でなけりや電波だな。

「本題？」

「そう。僕は世界を旅してお宝を探していると言っただろう？  
率直に言おう。この世界のお宝は何か教えて欲しいんだ。」

「この世界の、お宝、ですか、…えと、き、金塊とか、ですか？」

「そうじゃない。僕が探しているのはそういうお宝ではなく、この  
世界でしか手に入らない物ということだ。」

「この世界でしか手に入らないもの、ですか、うーん、なんでしょ  
う。」

「もういい、時間をとらせてすまなかったね。帰っていいよ。」

「え、もういいんですか？え、えと、お役に立てず申し訳ありません。  
ん。」

朝比奈さん、あなたが謝る必要なんてどこにもありませんよ。むしろ  
お前、海東大樹とかいったか、お前が朝比奈さんに謝れ。

朝比奈さんが謝り終えて立ちあがろうとした時、

「グオオオオオオオオ！！！」

地獄の底から響いてくるような唸り声。

二人は声のした方を振り向く。

そこでは鶴屋さんがトカゲのような、そう、俺達を襲った怪人と似  
た化け物と戦っていた。

戦うと言っても必死にトカゲ怪人の攻撃をかわしているだけだ。よ  
くかわせるな、俺は脚がすくんで動けなかったのに。

一応攻撃も試したのだろう、握った右こぶしからは血が滲んでいる。  
きれいな手が、もったいない。

「あれは。」

キヤアアアアアアアアアアアアアア！！！！

海東の声に被せるように朝比奈さんの悲鳴。

その悲鳴を聞いたトカゲ男は朝比奈さんに気付く。

「みくる！来ちゃダメ。逃げて。」

鶴屋さんはそう言いながら怪人と朝比奈さんの間に割り込むように立ち位置を変える。こんな時でも朝比奈さんを守ろうとするとは、あなたは騎士か何かですか。

しかし、更にその前にあの海東が割り込む。鶴屋さんは驚き声を上げる。

「アンタ、危ないよ。みくるを連れて逃げて。」

しかし海東は鶴屋さんの必死の声にも怪人にも大して動揺した様子もない。

「安心したまえ。こういうのは僕の専門でね。」

そう言うところから取り出したのか右手には銃状のもの。

そこへディケイドと同じようなカードをこれまた何処からともなく取り出し銃へと挿入。

「カメン、ライド。」

独特の音声と効果音。海東は銃口を上に向け引き金を引く。

「ディッエンド！」

音声と同時に銃口から打ち出された青いカードのような物が射出された。

そしてそれらが海東のすでに変身し終えた頭部に突き刺さる。

その瞬間、それまで灰色だったディエンドの体の部分に青みがさす。変身が完了したようだ。

「な、何者だい、あんた。」

鶴屋さんは驚き声が震える。

「通りすがりの仮面ライダーってところかな。ま、なんでもいいけど。」

それだけ言ってトカゲ男めがけ駆けだす。

それを見たトカゲ男は咆哮。

それを聞きつけたのか背後の雑木林からさらに3匹のトカゲ男が現れる。

「これくらいじゃないと張り合いが無いね。」

海東はそう言い新たなカードを取り出し挿入。

「カメン、ライド、ライオ トルーパー！」

音声の後何もない方向へ向け引き金を引く。  
すると何処から現れたのか三体のライダーに似た姿の者たちが現れる。

「僕の優秀な兵隊たちだ。君達とどっちが強いかな。」

海東はセリフの後で引き金を引く。

海東の銃撃が合図だったかのように3体のライオトルーパーが突撃。それぞれが1体ずつのトカゲ男を相手にする。

必然的に余った一体がディエンドの相手となる。

しかし大口をたたくだけはあつてその実力はディケイドに引けを取らない。

あつという間にトカゲ男を押し切り最後の回し蹴りで吹き飛ばす。  
ちょうどそこへライオトルーパー達が吹き飛ばしたのか残りのトカゲ男達も転がってくる。

「そろそろ、トドメと行こうかな。」

新たなカードを挿入。

「ファイナル、アタック、ライド デイディディエンド！」

音声と共に前方に無数のカードが筒を描くように現れる。

照準を合わせ一気に引き金を引く。

銃口から極太のレーザーが発射されライオトルーパー達も巻き込んで4匹のトカゲ男達へと炸裂する。

4体のトカゲ男は一瞬で爆散。

変身を解いた海東の下に朝比奈さんが行き、

「今のは一体……」

海東に尋ねる。しかし海東は首を振ると答える。

「僕にもわからない、この世界には怪人はいないはずなんだけどもでも待てよ、士達がこの世界に来るときに一緒に紛れて来たのかも。」

後半は海東が一人でブツブツ言っていた。朝比奈さんはここで何か思い立ったかのように呟く。

「もしかして、涼宮さんが原因かも。」

それに対して海東が反応。鶴屋さんはいつの間にか気絶している。朝比奈さんが何かしたのだろう。

「涼宮さん？それって涼宮ハルヒの事かい？」

「ご存じなんですか？」

「まあね、でもどうして知っているのかは僕も知らないし一体その人がどんな人物かもわからない。

何しろ会ったことが無いからね。それで、どうしてその涼宮ハルヒが関係しているの？」

「今日、涼宮さんが言ったんです、仮面ライダーを見たって、それでこの世界にも怪人が現れればいいのにつて。」

「どうしてそれで彼女が原因だっと思うんだい？」

そこで朝比奈さんはすこしの間をおいてから、

「涼宮さんには、願望を実現する能力があるんです。」

海東はここで始めて動揺を見せる。

「なんだって!？」

それから朝比奈さんはハルヒのこと、ハルヒを取り巻く様々な組織のこと等について洗いざらい話した。

何故初対面の海東にこんなことまで教えるのかというと、まあ、恐らく、俺と同じ理由だろう。

話を聞き終えた海東が残念そうに言う。

「なるほどね、よくわかったよ。要するにこの世界のお宝はやはり涼宮ハルヒ、ということか。

まいったな、お宝が人物だというなら手に入れることはできないね。残念だ。」

海東は言い終えるとベンチから立ち上がり背を向けさっさと歩きだす。

「涼宮ハルヒ、か。俺もそいつに会って見る必要がありそうだな。」  
後方で何かが変化する音、続いて足音。

「またお前か、鳴滝。」

「デイケイド。貴様のせいでこの世界もおかしくなっちゃった。  
本来は怪人などいない世界のはずだったのに、お前が来たせいで、  
この世界は破壊される。」

それだけ言つと鳴滝は何処へともなく消えてしまふ。

「俺のせい、か。」

ゝ1幕 異変ゝ（後書き）

こちら辺から色々とアイデアの限界を感じました  
アドバイス等よろしくお願いします。



## く2幕 謎の転校生その2く

日付は変わって翌日。

いつも通りの通学路、いつも通り谷口と国木田に挨拶し、げた箱へと向かう。

いつも通り靴を履きかえようとしたところへ朝から聞きたくもない声が聞こえる。

「まずいことになりました。」

「古泉。俺にもまずいことが起こったぞ。」

朝からお前に会うなんて、今日は多分厄日だな。」

そんな俺の皮肉は無視して古泉は話を続ける。

「とにかくまずいことになったんです。」

世界が壊れるかもしれません。」

「世界が壊れる？」

「はい。今までにない規模で世界が改変されました。それも一晩で。」

「

「どう改変されたんだ？」

薄々感づきつつも一応聞いてみる。

「怪人が現れたんですよ。」

「何イー！？なんてな。知ってるよ。俺も昨日襲われたからな。」

「へえ、そうですか。お怪我はありませんか？」

「ねえよ。で、どうするんだ？」

あつたら来ないだろう。

「今のところ有効な策は特にありません。今できるのは涼宮さんに怪人の存在が露見しないようにしつつ、

彼女に怪人なんて居なくていい、居るはずがない、と思わせることくらいですかね。」

「要するにお前も俺と同じ意見なんだな。」

「あなたも同じ考えでしたか、これは嬉しいですな。」

「気持ち悪いぞ。で、ハルヒにそう思うように仕向けるのは誰がやるんだ？」

「おや、その質問の答えは既にわかっていると思いましたが。」

「つまりは、俺ってことか？」

「そう言うことです。涼宮さんに最も影響を及ぼせるのはあなたしかいませんから。」

「はあ…わかったよ。やるだけやってみる。」

やれやれ、なんでいつもこういう面倒なことを押しつけられるかね、俺は。

心の中で悪態をつきつつも古泉と別れ教室へ、ここからはまたいつも通りの日常が始まると思っていたんだが…。

朝のホームルーム。正直言っただけでもいい時間を俺はさつさと終わらないかと思いいながら聞くともなく聞いていた、

「えー、では突然だがここで転校生を紹介する。」

教師のその言葉に生徒一同ざわつき始める。

谷口の女の子かな？可愛いかな？という独り言は全員無視だ。

「いいぞ、入ってくれ。」

その声でドアがガラリと開く。そして入ってきたのは、谷口の望み通りの絶世の美女、ではなく。

「門矢士だ。よろしく。」

士だ。仮面ライダーディケイドとやらに变身するあの門矢士だ。

一体何の目的があつて転校してきたのかは知らんが、その格好、かなり無理があるぞ。

どう見たって高校生には見えん。

確実にコスプレだ。

そんなことを思う俺のところへそいつはスタスタと歩いてくると、

「よっ。」

いきなり声を掛けてきやがった。何処となく古泉を連想して気分が悪くなる。

何とかしてこいつがなんでここに居るのかを問い正さねば。

俺はすつと士の耳元へと口を持って行き（変な意味じゃないぞ）ささやく。

「お前、なんで。」

「決まっているだろう。護衛だ。」

「護衛だったって、もつと他に方法があるだろうが。」

「いいだろうが。この方が堂々と護衛ができる。」

「ちよつと、ちよつと、キョン、アンタこの転校生と知り合いなの？  
てか何コソコソ話してるのよ、アタシも混ぜなさい。」

何故そうなる。

しかしハルヒの突然の乱入によって俺達の会話は中断された。

こいつにバレるわけにはいかないからな。

会話が中断したのを皮切りに教師が授業を始め出す。

士も自分の席へと移動した。

そしてかれこれ6時間。

俺は教科書をさつさと片付け愛しの朝比奈さんが待つ部室へと向かう。

いつものようにドアをノック。するとこれまたいつものように「はあゝい。」と天使の声。

My sweet angel 朝比奈さん。

それからはいつものように朝比奈さんにお茶を汲んでもらい、長門が現れ、少々遅れて古泉も現れ、

と日常が戻りつつあったその時、非日常の全ての元凶がドアを勢いよく開け放ちながら現れた。

「おつ待たせ。新入部員を連れて来たわよ。」

新入部員つてまさか…。

「門矢士だ、よろしくな。」

そのまさかだったようだ。士は自己紹介だけ済ませるとさも当然と言わんばかりに俺の隣にいつの間にか増えていたパイプ椅子を持つ

てくるとドカツと腰かける。

俺は土にだけ聞こえるような声で、

「目立ちすぎだぞ。気付かれないように護衛はどうした。」

すると土はフンと鼻を鳴らすと偉そうに言った。

「実際気付かれてないだろ？それにそばに居た方が何かと護衛がしやすいと思つてな。」

ま、俺クラスになると正体だけは明かさずに堂々とできるんだよ。

それに、涼宮ハルヒってのはどんなやつか俺にも興味があつたしな。」

ム力つく。話を聞きながら思つたのはそれだつた。

古泉とはまた違ったム力つきを覚えつつ聞き返そうと口を開きかけたその時。

「ちよつと、二人だけの世界に入つてんじゃないわよ。」

ハルヒがジトジトと睨んでくる。おいやめろ、そんな目で俺を見るな。

しかし、気を取り直してオッホンと一つ咳払いすると、

「今日から正式に新たな部員として活動してもらう、門矢士君よ。」

謎の転校生その2にして、スポーツ万能、頭脳明晰、おまけに謎の転校生その2よ。」

「謎の転校生2回いったぞ。」

「うるさい。キョン、あんた知り合いみたいだから門矢君にSOS団のなんたるかを隅から隅までしっかり教えてあげなさい。」

「SOS団のなんたるかつて、俺自身まだあまり理解できてないんだが。」

「つべこべ言わずに教えてあげなさい。いいわね。」

「へいへい……。」

さすがは理不尽大王である。

そんなこんなで新入部員の紹介だけして今日も特に何をするでもなく下校の時間を迎える。

「じゃ、今日の活動はこれでおしまい。キョン、鍵よろしくね。」

「はいはい…。」

それだけ言っただけでさつさとハルヒは部屋を後にする。

お前は一体何しに来たんだと言う俺のささやかな疑問は胸の奥にし  
まっておくとして。

ハルヒが去って5人になった途端、古泉が切り出した。

「門矢…士…君…でしたか。君、一体何者です？」

「仮面ライダー…。」

士が言いだすよりも早く長門が入ってくる。昨日のことはもう気に  
していないようだ。

いつも通りの調子が戻っている。といっても他の奴にはなんのこと  
かわからないだろうがな。

「涼宮ハルヒの願望によって現れた、仮面ライダー。怪人も既に現  
れている。」

私たちも昨日襲われた。」

淡々と長門が語る。古泉は納得、と言ったように手をポムツと叩き、  
「そうでしたか、あなたが。」

「ああ、よくわからんがそういうことらしい。」

士は腕と足を組んで言う。やるのがいちいち偉そうだな、コイツ。  
それから俺達は互いに現状の報告を行う。しかし、全て語りきるに  
は時間が足りず、俺達は場所を移し、いつものファミレスで話の続  
きをする。

そして何故から人で下校。何故そうだったのかは、成り行きと言っ  
やっただろう。仕方ないさ。

「しかし困りましたね。」

古泉があまり困ってなさそうな顔で言う。

「何が困ったんだ？」

俺はスル しようか迷ったが一応聞き返す。

「涼宮さんのことですよ。」

これだけの規模で改変されると、修復できないかもしれませんね。」  
「するとどうなるんだ？」

「世界は怪人に征服される。または仮面ライダーがこれを救う。」  
長門が答える。

「最悪世界が元に戻らなくても結果は後者だけだな。」  
士が偉そうに言う。

「あの…。」

朝比奈さんが言いくそうに切り出す。

「わ、私実は昨日門矢さん以外の仮面ライダーにあってるんですけど…。」

そう言い朝比奈さんは昨日のいきさつを語り始める。さっき語った朝比奈さんの回想は、この話を聞いて考えた、正直言って半分俺の妄想だ。

それを聞いた士は、

「なるほどな、大体わかった。アイツ、一体何をたくらんでやがる。」

「なんだ？知り合いなのか？」

「まあな。」

「どんな奴なんだ？」

俺がその疑問を口にしたその時

グオオオオオオオオオオオオオオ！！

聞き覚えのある雄たけび。その中で戦う青い影。

「噂をすればってやつだ。」

士はそう言い一歩前へ踏み出すとバックルを装着。変身の掛け声と共にカードを挿入。

「カメン、ライド」

電子音が聞こえ、士がバックルを閉じる。

「デイクイド！」

変身が完了すると士は先程から戦っている青い戦士の所へと駆けていく。

「よう。」

目の前のトカゲ男を蹴り飛ばしながら士は青い戦士へと軽い挨拶。

「ちょうどよかった。士、手を貸してくれ。」

青い戦士、海東大樹扮する仮面ライダーディエンドは目の前の敵を銃で殴りつけつつそう言った。

「それにしても数が多いな。一体どこから湧いてきやがった。」

「さあね、僕にもわからないよ。そもそもこの世界には怪人は居ないはずだからね。」

二人は背中合わせに言い合うとお互いに背を守りつつ戦う。

「このままじゃ埒が空かないな。」

士はそう言い新たなカードを取り出し挿入。

「こういう時には、これだ。」

「カメン、ライド」

バックルを閉じる。

「カブト！」

先ほどとは違う電子音と共に新たな変身。赤の戦士、仮面ライダーカブトだ。

両手のパンチで二体の敵をまとめてふっ飛ばし新たなカードを取り出す。

「アタック、ライド」

「クロックアップ！」

次の瞬間士の姿が消える。

と同時に周辺の敵が一気に爆散していく。

「やるね、じゃあ僕も。」

今度は海東が新たなカードを取り出し銃に挿入。

「カメン、ライド」

海東は銃を構え引き金を引く。

「ブレイド！」

すると海東の前に別のライダー、仮面ライダーブレイドが姿を現す。更にカードを挿入。

「ファイナル、フォーム、ライド」

「痛みは一瞬だ。」

そう言い海東はたった今召喚した仮面ライダーブレイドに銃口を向けると躊躇なく引き金を引く。

「ブブブブレイド！」

撃ち抜かれた仮面ライダーブレイドはそのまま消えるのかと思いきやあらぬ形へ変形。その姿は大剣のようだ。

それを左手に持つと、向かってくる敵をなぎ払う。なぎ払われたトカゲ男たちは爆発と共にその数を減らしていく。

「トドメといくか。」

いつの間にか姿を現した土がこれまたいつの間にか新しいカードを手に持ち言い放つ。

「ファイナル、アタック、ライド」

「カカカカブト！」

それを見た海東も新しいカードを手に、

「それもそうだね。」

と言い銃へと挿入。この間誰ももつ者の居ないブレイドの大剣は海東の手の高さで浮いている。

「ファイナル、アタック、ライド」

「ブブブブレイド！」

土扮するカブトは空中へと跳躍するとそこからライダーキックを残った敵の一団めがけ放つ。

海東は手に持つ大剣を大きく振りかぶり一気に振りおろす。

剣先からは衝撃波が生まれ別の敵の群れ目がけ突き進む。

両者とも命中。

大爆発。

爆煙が晴れると二人が変身解除して立っていた。

場所は変わってとある廃屋。

ここに先程までディケイド達と戦っていたのと同種のトカゲ男達が



集まっている。

その中心にはトカゲ男達とは微妙に姿の違う、例えば背中やしっぽの棘が大きかったり、

体色が禍々しい紅色だったり、のトカゲ男達の親玉と見える怪人が立っている。

トカゲ男の親玉は一度辺りを見回すと大音量で怒鳴り声を上げる。

「涼宮ハルヒを探せ！ 奴の力を使えば我々がこの世界を手にするのだ！」

怪人たちはその声に答えるように一斉に雄叫びをあげると散って行った。

## く終幕 仮面ライダーキョーン

次の日。

現在3時間目の数学の授業中。

前方では教師が意味のわからない数式を黒板に書き、どこの国の言葉かわからないような言葉を連呼している。

要するに俺は授業に置いて行かれたわけだ。今度のテストは赤点だなこりゃ。

こりゃハルヒにでも頼んで教えてもらうしかないな。

あいつが一番率先して遊びまくっているにもかかわらず成績がいいって一体どんなからくりだ。

天の人に対するパラメータ配分は随分と適当だな。俺にもあと5グラムでいいから分けてくれ。

などと考えていると不意に教師が、

「よし、門矢、この問題解いてみる。」

と言って土を指名する。

土は立ち上がると悠々と黒板の前まで歩いて行きカッカッカッと音をさせ黒板に答えを書いていく。

優雅に書いているのが見ていてム力つくが答えは合っているようなので文句は言えない。

ため息交じりに頬づえをつき、ふと外を見る。

「っあれは！」

とっさに立ちあがっていた。

土も異変に気付いたのかすぐに窓へ駆け寄りグラウンドへ視線を落とす。

グラウンドでは信じられない光景が広がっていた。

先程まで体育でもしていたのだろっ、走り高跳びのセットがグラウンドに出ている。

その走り高跳びのセットが無残に壊され、授業を受けていた生徒達

は何処からともなく現れた得体のしれない怪物達に襲われている。そう、おととい、そして昨日も現れていたあの、トカゲ男たちだ。それが学校に、それも堂々と現れたのだ。

奴らはグラウンドの生徒達を追いまわし、押し倒し、踏みつけたり噛みついたりしている。

そして今までと決定的に違うのはその規模だ。

「何て数だ。」

グラウンドを埋めつくさんばかりに現れたトカゲ怪人たちは学校が目的とでも言うように圧倒的兵力で迫ってきている。

「いくぞ。」

「ああ。」

士と俺はそう言うときすぐさま教室を出た。

「変身！」

「カメン、ライド     ディケイド！」

士が変身する。

向かってくるトカゲ男達の一団へと突進しパンチ、キックの連打で敵を吹っ飛ばす。

「アタック、ライド     スラッシュ！」

士の斬撃。回転しつつ全方位へと斬りつける。

食らったうちの何体かはたまらず爆発と共に消滅する。

しかしいかなせん数が多すぎる。いくら倒しても一向に数が減らない。

これはさすがにヤバいんじゃないか？数の力とは恐ろしいものだ。

俺の数学の点数が一向に上がる気配を見せないのも……って話が違つか。

その時後ろから声がした。

「なん……なの……こいつら……。」

この声は、間違いない、ハルヒだ。

ハルヒの奴が俺達の後を追い、外に出てきていたのだ。

振りかえるとそこには案の定ハルヒが居て、

「くそつ。」

奴らが周りを囲んでやがる。

ハルヒは普段は絶対に見せない、いや、今までそんな顔したことないんじゃないかと思う程の恐怖にひきつった顔をしている。

なんというか、こいつにこういう顔をされると無性に守ってやりたくなる。

今のは忘れよう。

「いや。」

かすれた声でハルヒが何か言っている。

俺は思わず走り出す。

「ハルヒ！」

ハルヒを囲むトカゲ男の内一体に飛びかかる。

が、やはり生身の人間の俺に歯が立つわけもなくいともたやすく振り払われ、

その勢いのままボディブローを入れられ、悶絶したところを尻尾で吹き飛ばされる。

俺はグラウンドの砂上を無様にゴロゴロと転がり、数メートル転がったところでやっと止まる。

正直言つて腹は痛むし呼吸もし辛いが俺はすぐさま何とか身を起し立ち上がるうともがく。

ハルヒの居る方へと視線を向ける。

俺を吹っ飛ばしたトカゲ男が俺にトドメを刺そうと近づいてくる。

くっ、もう駄目か。

「アタック、ライド      ブラスト！」

すぐ目の前まで迫ったトカゲ男が火花を散らしながら大きく後退。

どうやら土が助けてくれたらしかった。

普段は偉そうだがライダーとしての使命感みたいなものはちゃんとあるんだな。

その他のトカゲ男達にも土の銃弾が命中。

そいつらは大きく怯む。

「おい、キヨン、立てるか？ 涼宮ハルヒを連れて、中に入ってる。」

士はそう言い怯んだ怪人たちに更に銃撃の雨を降らせる。

「わかったよ。」

俺は何とかそれだけ言うが無理矢理立ち上がりハルヒの手を取る。

こりやどこか折れてるな、肋骨的なものが。

「ハルヒ、こっちだ。」

ハルヒは一瞬ホツとした表情を浮かべ、すぐに真剣な表情になると俺に引かれるまま駆けだす。

とりあえずどこかの教室に逃げ込もう。そう考え駆けだす。

そして足の向くままたどりついた教室。

元文芸部室、現SOS団の部室へと俺達は着いた。

「ハア、ハア、ここまで来れば。」

隣でハルヒも膝に手をつき肩で息をしている。

息を整えハルヒに怪我は無いかと聞く。

ハルヒは首を振ると部室のドアへと手を掛ける。

そして中へと入る。

俺も続いて中へ、入れなかった。

ハルヒが入って一歩も行かない内に固まってしまったのだ。

「おい、どうした、ハル…ヒ。」

戦慄した。

部室には先客がいたのだ。

もちろん団員ではない。

トカゲ男だ。

いや、微妙に違う。そもそも体色が紅だし、体も一回り大きい。

その怪人は俺達を見るとニヤリと笑った（様な気がした）。

そしてその口からこの世のものとは思えないような低い声を出す。

「貴様が涼宮ハルヒか。」

ハルヒは答えない。否、答えられないのだ。

怪人の放つ殺気のせいでハルヒはガタガタと震えている。

それはもちろん俺も同じだ。

俺はハルヒを守ってやるところか、一人で逃げ出すことすらできないらしい。

「貴様には面白い能力があるそうだな。」

おい、コイツ、いきなり何言い出すんだ？

「お前には、願望を実現させる能力があるんだろう。」

コイツ、なんでハルヒの力のことを。

怪人は一歩近づく。

「その力、この私のために使う気はないか？どうだ、ん？」

そう言いハルヒに手を伸ばす。

ヤメロ、ハルヒに手を出すな。

「くそ、さすがに数が多いな。倒しても倒しても数が減りやしねえ。」

士はまだ戦っていた。

とはいえその動きは最初ほどの切れはない、疲労が蓄積しているようだった。

それでも攻撃の手を休めず前方の2匹に上段回し蹴りを食らわせる。食らった二匹は地に倒れ伏す。

と、ここで後方に居た3匹が跳躍すると土めかけ飛びかかる。

士は蹴り終えたばかりで態勢が整っていない。

「しまっ……。」

バンバンバン。

火花を散らせながら三匹のトカゲ男が無様に地面に倒れる。

もちろん士への攻撃は失敗だ。

士は驚いて銃弾が飛んできたであろう方向へ振りかえる。

「お前。」

そこには海東大樹が居た。

「やあ、士。」

「何しにきやがった。お宝はいいのか？」

「この世界のお宝は涼宮ハルヒそのものだ。」

「お宝が人じゃ、僕にはどうしようもない。今回は諦めたよ。」

「じゃあどういふ風の吹きまわしだ？お宝も無いのに俺を助けるなんて。」

「勘違いしないでくれたまえ。僕はお宝が手に入らなくてムシヤクシヤしているだけさ。」

「カメン、ライド　ドイツツエンドー！」

海東がディエンドに変身。士の方へと跳躍。

「士、ここは僕に任せて行きたまえ。」

銃撃しつつ海東は言う。

「ああ、わかった。」

士はそれだけ言う。目の前のトカゲ男を蹴り飛ばし駆けだす。  
目指すはSOS団の部室だ。

「あたしが、世界を思い通りにできる？…」

ハルヒは激しく動揺しているようだった。怪人が続ける。

「そうだ。お前が望めば、どんなことでも起こせるのだ。」

その力、ぜひ私のために使ってもらいたい。」

「何…それ…」

こいつ、なんでハルヒの力のことを。とにかくアイツに何か言つてやらないと。

「ハルヒ。そんな奴の言うことなんか聞くんじゃねえ。」

「ッ…。そうよ。あんたの言うことなんて聞かないわ。」

たとえばそれが本当だとしても、あたしはあんたのいいなりになんか

ならない！」

「そうか、ならば、死ね。」

怪人が爪を振り上げる。ハルヒが危ない。

俺はとつさに駆けだしていた。今思えば、なんでこんなことしたかね。まさかハルヒをかばって自分が斬られるなんて。

なんつー間抜けだよ、俺。

ザシュツ

「…キョン？…キョン。ねえキョン。目を覚ましなさいよキョン。

嫌…嫌　　！！！！！」

「フハハハ。バカな奴だ。さあ、涼宮ハルヒ、これが最後だ。私のために力を使え。」

「…さない…」

「ん？何か言ったか？」

「許さない。よくもキョンを！」

あんたさっきあたしには世界を望み通りにできる力があるって言ったわよね。」

「やっと思っ気になったか。」

「ええ。望み通り使ってやるわ。」

窓の外が暗闇になる。突風が起こり外の全てを飲み込み始める。

「こんな世界、破壊して　　」

「よせ！」

教室のドアを蹴破り、勢いよく登場したのは仮面ライダーディケイド、士だ。

「お前が変えなくても、俺が変えてやる。

そいつがこうなったのも、半分は俺の責任だしな。」

「カメン、ライド　　リュウキ！」

士は新たなライダーへと変身。そしてその手には一枚のカード。



「アタック、ライド タイムベント」

「あたしが、世界を思い通りにできる?…」

ハルヒは激しく動揺しているようだった。怪人が続ける。

「そうだ。お前が望めば、どんなことでも起こせるのだ。

その力、ぜひ私のために使ってもらいたい。」

「何…それ…」

こいつ、なんでハルヒの力のことを。とにかくアイツに何か言っ  
てやらないと。

「ハルヒ。そんな奴の言うことなんか聞くんじゃねえ。」

「ッ…。そうよ。あんたの言うことなんて聞かないわ。

たとえそれが本当だとしても、あたしはあんたのいいなりになん  
かならない!」

「そうか、ならば、死ね。」

怪人が爪を振り上げる。ハルヒが危ない。

しかしここで妙なことが起こった。

ハルヒと怪人の間の空間が歪んだのだ。次元の裂け目というやつだ。  
そして、次の瞬間みたこともない仮面ライダーが怪人の爪を手に持  
った刀で受け止めていた。

「な、なんだ!？」

怪人は動揺する。

ライダーは怪人の爪を弾くと返す刀で一閃。  
食らった怪人は後方へとよろめく。

「よう。危なかったな。」

そのライダーは俺に向かって気安く話しかけてくる。

この聞き覚えのあるム力つく声は、

「お前、士か!？」

「おう。そうだ。」

「なんでこんなところに。」

「色々あってな。っと、その話は後だ。今はこいつを倒す。」

そう言う土は怪人めがけ突貫。手に持つ剣で怪人を斬りつける。

しかし、怪人も態勢を立て直したのか、数発食らった後は爪でしっかりガードしている。

さすがは親玉といったところか。

土の剣撃が受けられ始めて数発。敵が土の刀を捕まえる。

弾いてからの爪による一閃。土はたまらずよろめく。

怪人はすかさず追撃の爪攻撃。

全てともに食らい最後の尻尾攻撃で吹き飛ばされる。

衝撃で変身が解け、いつものディケイドへと戻る。

俺はハルヒを守るようにそばへと来てそれを見ていた。

くそ、コイツ、強い。

土が何とか立ち上がる。しかし、疲労とダメージでフラフラだ。

怪人は最初の余裕を取り戻し悠々と間合いを詰めてくる。

バキッ！

怪人の後頭部に机が命中した。

何事かと思ひ視線を移す。

理由はすぐに分かった。

長門だ。

長門が力を使い机を飛ばしたのだ。

「き、貴様。」

怪人が長門に対し逆上し襲いかかる。

長門はヒラリと身をかわし土の横に着地。

両手を広げると後方の壁のなかから、無数のつくえやら椅子やらが飛び出て来て怪人を襲う。

心なしか楽しそうに見える。まあ一昨日は歯が立たなくて鬱憤もたまってただろうしな。

怪人はそれを何とか爪でたたき落としながら身を守っている。

ん？ちよつと待てよ。長門の力つて怪人に対しては使えないんじゃない？

「怪人本体に直接使用するのは不可能。でもそれ以外に使用し怪人にぶつけるなら可能。」

長門の俺の心の声を聞いたかのような適切な説明。恐縮です。

「なるほどな。こいつもただの人間じゃないってわけか。」

士は一人納得したようにうなずくと跳躍し飛んでいく机の一つに飛び乗る。手には一枚のカードを持って。

「アタック、ライド      スラッシュ！」

すれ違いざまに一閃。

怪人はその一撃をくらい完全に態勢が崩れたのか残りの机やいすの嵐をまともに食らう。

ぶつかつた机や椅子が全て粉々に碎けるまでそれは続いた。

後半は正直やりすぎだろと思わんこともなかった。

しかしそこまでされても怪人はおなじみの爆発とともに消滅したりはせず。

「き、貴様ら。許さん、許さんぞ。」

そう言つと敵は逆上して襲ってくる、と思つたが不意に現れた空間の歪みへと姿を消した。

やれやれ、言つてることとやつてることが違うぞ。お前はどこぞのフリーダムか。

まあアイツの場合止めると言いながらバンバン撃つてたわけだから微妙に違うが。

「閉鎖空間に入った。」

長門が淡々と言い切る。これ以上怪人を痛めつけられずにちよつと残念、といった感情が声音に含まれていたと思つたのは俺の気のせいではないだろう。

「なるほど、で、どうやったらその閉鎖空間てのに行けるんだ？」  
「任せて。」

長門が何やら呪文の様なものを唱え始める。

すると怪人が発生させたものと似た空間の歪みが現れた。  
「入って。」

長門に促され士は迷いなくその中へと飛び込んだ。

「ここまで来れば追ってはこれまい。」

「それはどうかな。」

「な、貴様。何故。」

「悪いが、逃がすつもりはないぜ。」

士は言いながら怪人めがけ突進。

斬撃をたたきこむ。

が、しかし、やはりこれも受け止められた。

受け止めたのと反対の爪で振りおろし攻撃。

士は後方へ大きくよろめく。

「ちっ。」

「フハハハ。貴様一人なら、私の相手ではない。」

「ならば二人ならどうです？」

怪人の後ろから声。この声は。

「古泉、と言ったか？」

「おや、覚えていてくれたようですね。そうです。古泉一樹です。

ようやく出番のようですね。」

そう言う古泉の手にはオレンジ色の波動のようなものが。

それを怪人めがけ打ち出す。

怪人はこれを爪で弾くと古泉めがけて切りこむ。

しかしこれを空中に浮遊してかわすと浮いたまま波動を打ち出す。

これには怪人も防戦一方になっている。

「俺も忘れてもらっちゃ困るな。」

士が背後から怪人の背中を切りつける。正直言って卑怯だ。

態勢を崩した怪人は古泉の打ち出す波動までも受け大きく吹き飛ばされる。

「くっ！」

怪人はまたも空間に歪みを作ると外へと脱出した。

「外へ出ましたか。」

「俺も出してくれ。」

「わかりました。」

ひと足早く現れた怪人はハルヒの方へと走ってくる。

「おい、頼む。世界を変えろ。今すぐ変えるんだ。奴の居ない世界に、今すぐ。」

怪人はさっきまでの命令口調ではなく頼むようにハルヒに言い、手を伸ばす。ハルヒと俺の居る場所まで後数メートルと迫ったその時、

バン！

銃声。

怪人は火花と共によろける。

そこにはディケイド、土が居た。

怪人はそれを見ると急に喋り始める。説得を試みるようだ。

こいつの傍若無人な性格からして何を言っても聞きやしないとは思うがね。

「何故、何故我々の邪魔をする。」

お前たち人間にも、世界を変えたいと思うことがあるはずだ。」

しかし土は冷静に返す。

「確かに、人間もそう思うことがあるさ。それもしょちゅうな。

だがな、思い通りにならないからこそ楽しいんだ。

思い通りにならないからこそ、人は努力するんだろうが。

ここがお前と、俺達人間の違いだ！一緒にするな。」

「き、貴様、何者だ。」

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ。」

「グオオオオオオオオオオオオ！許さん。許さんぞ！」

怪人は最後の攻撃に向け雄叫びを上げ士気を高めている。

士の必殺技が決まり見事怪人を倒しハッピーエンド、といわけには

いかず、

後ろからの突然の声。

「キヨン。あんたも変身しなさい。」

「は？」

何を言っているんだこいつは。恐怖のあまり壊れたか。

「だから、あんたも変身してこいつを倒すの。できるわよ。あたしには、願望を実現する能力があるんだから。」

さつきまで怯えきってガタガタ震えていたとは思えないくらいに元氣いっぱいの声音で俺にそう言ってくる。

自分の能力まで知って向かうところ敵なしだな。

そんなハルヒにそこまで言われちゃ断れないわけで、というか正直俺も変身してみたいって願望は少しくらいあったさ。

いや訂正、大いにあった。

というわけで、いつぞやのテレビで見た仮面ライダーの変身ポーズをうる覚えで再現してみる。

「へーん 身！」

するとどうだ。俺の体は黒と茶色のスーツに包まれ腰には日本刀らしきものが吊り下げられているではないか。

色が地味とか、武器が何故日本刀なんだとかの突っ込みは受け付けません。

兎にも角にも俺の変身は成功したようだ。

と、機嫌の悪そうなハルヒの声。

「やり直し。」

へ？

「やり直しよ。変身がダサすぎるわ。そんな昭和の変身じゃ全然納得いかないわ。もう一回よ。」

アホか。どこの世界に変身したらダメだしされて、やり直す仮面ライダーが居るんだ。絶対やらねえぞ。断じて。

ここでやり直したら俺は俺でなくなる。

そこで怪人が怒りに震えた声を俺に向けて放つ。

「貴ッ様アアア！この私をコケにしやがってえええ！」

いやほんとゴメン。でも一番コケにしているのは俺ではなくアイツだと思っぞ。怒るならアイツに怒ってくれ。

さっきまで心配してた俺がバカみたいじゃないか。

そんな俺の願いとは裏腹に怪人は逆上して襲いかかってくる。

これ、やばくないか？

「キヨン！ミサイルよ。」

ミサイル？ミサイルだと？んなもん一体どこにあるんだよ。そもそも何故ライダーがそんなものを使う。

そう思いながらふと見ると俺の右手にはミサイルが。

マジかよ。

それを怪人めがけ投げつける。

突然のことで怪人は全く対応できずに爆風の餌食となる。

当然だ。俺だって未だにわけがわからん。なんでミサイルだ。アホか。

怪人はしかしまだ生きていた。

「全く、しぶとい奴だな。」

「同意。」

俺の意見に長門が同意してくれる。

「斬り込んで。サポートは私がする。」

長門に言われ俺は迷わず突進する。

当然だろう。長門のサポートなら100%頼れると断言できる。

突撃する俺の脇を机やら椅子やらがビュンビュンと飛んでいき怪人にぶち当たる。

怯んだところへ俺の会心の突き。悪・即・斬ってなわけでは断じてない。

命中。しかし怪人は少しよろめいただけで倒れない。

そこへ土が割り込みよろけた怪人にパンチ、キックの嵐。

最後に後ろ回し蹴りをお見舞いすると怪人はたまらず吹き飛んだ。

「トドメはお前にやるよ。」

士がカードをバツクルに挿入。

「ファイナル、アタック、ライド                      キョキョキョキョーン！」

ん？今俺の名前言わなかったか？というか俺の名前はキョーンじゃないぞ。それは俺のあだ名だ。

と、俺が突っ込んでいると俺の目の前にディケイドの必殺技の時のようなカード群が現れ始める。

「お、おい。どうすりゃいいんだよ。いきなり必殺技とか言われてもだな、俺にも心の準備が。」

「なんでもいい。蹴るなり、斬るなり、好きにしろ。」

んな投げやりな。そっぴゃヒーローってどういつぶうに必殺技とか考えてるんだ？

「飛んで。」

後ろから長門の声。俺は言われるままにジャンプした。すると俺の足元に一つの机が、足場となり怪人めがけ突き進む。

物凄い速さでカード群の中をぐりぬけていく。

ええい、こうなったらもう、やけくそだ。

俺は手に持った刀を思いっきり振りぬいてやった。

その一撃がちょうど怪人の胴を薙ぎ、受けた怪人は断末魔の悲鳴を上げ爆発と共に消滅。

俺は変身が解けた。

「すごいじゃない、キョーン。」

そう言い駆け寄ってくるハルヒ。

俺が覚えているのはここまでだった。



## くエピソード そして日常へく

数日後、俺は自宅のベッドで目覚めた。

倒れた原因はインフルエンザ、だそうだ。

ただ正直言つて妹の看病と称した嫌がらせには本気で泣きそうになった。本人に悪気はないのだろうか。

母が熱が下がっても二、三日安静にしていなさいと言つので学校は休むことにした。

そして明日から学校へも行くことにした日の夕方、予想外の客が俺の家に来た。

「な、長門？なんでうちに？」

「お見舞い。」

それだけ言つと長門は靴を脱いで上がる。まだ何も言つてないんだが。というかもうお見舞いなんて必要ないくらい元気なんだがな。

長門は脱いだ靴を揃えてから俺の方へ向くと、

「あのあとどうなったのか、気にならない？」

と言つてきやがった。なるほど、それを俺に教えるためにわざわざ。御苦労様です。

長門の話によると俺が倒れてまたもやハルヒが暴走し、世界は改変されそうになった。

それを士が何かの力を使い、この世界に怪人が現れる前、

具体的にはあの月曜日へと時間を戻したんだそうだ。俺、参上つてわけだ。

あとは長門の情報操作で怪人が現れないようにし、一件落着、だそうだ。

じゃあ何故最初から怪人が現れないようにしなかったかと言つと、長門曰く、

「あの時は怪人のデータが全く無かったから手の施しようがなかった。」

でも一度体験したのなら話は別。怪人のデータも分析し終えていたから問題なくできた。」

だそうだ。

ちなみに何故時間を戻したのに俺には記憶があるかと言うと、これも長門曰く、

「門矢士に頼まれた。」

だそうだ。アイツもアイツで一体何がしたかったのかね。

しかしハルヒが仮面ライダーを見たというのは結局変わらず、俺達は明後日の土曜日、めでたく怪人探しをするのであった。当然何も見つからなかったが。

## くエピソード2 神曲の世界く

「やっと帰ったか。遅いぞ、なつみかん。一体今まで何処で何をやってたんだ。」

「それがですね、光陽園学院というところまでユウスケと来たのは覚えてるんですが、

そこから先の記憶が曖昧ですね。」

「なるほどな。恐らく情報統合思念体とやらの仕業みたいだな。とにかく何も無くて何よりだ。次の世界へ行くぞ。」

「え？土君、もうこの世界でのやるべきことは終えたんですか？それに情報何とか体って一体……。」

「そんなことはどうでもいい。さっさと次へ行くぞ。」

土にせかされたなつみは渋々と言った感じで次の世界へ行くための毎度おなじみの動作を始める。

そして降りて来たのが、

『神曲 DANTE'S INFERNO』

と書かれたスクリーンだ。周りにはこの世の物とは思えないおぞましい絵と大きな鎌状の影が描き込んである。

「ここは……。」

「神曲？」

「あ、私知ってます。神曲っていうのは昔の有名な詩人、ダンテっていう人が書いた物語みたいなものですよ。」

「ついに俺達は物語の世界にも来ちゃったっていうことが。」

俺達の冒険はまだまだ続くようだ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0070m/>

---

仮面ライダーディケイド～涼宮ハルヒの世界～

2011年3月26日15時08分発行